

第25回新収蔵品展

# ふくおかの歴史とくらし

平成25年9月14日(土)～10月20日(日)

特別展示室 A



博多祇園山笠 追い山

## 一 掘り起こされた福岡の歴史

考古学は、地中から掘り出された遺構や遺物から当時のくらしを考える学問です。発掘調査によって出土した遺物を丹念に調査研究することで福岡の歴史を明らかにしています。

西区JR姪浜駅南側には、五島山とよばれる所があります。現在は姪浜中央公園や住宅地となっていますが、かつては、名前の通りの山で、頂上付近には古墳がありました。大正三(一九一四)年十月十三日に、そこにあつた箱式石棺から、古墳時代の勾玉や銅鏃などが出土しました(1)。特に後漢～三国時代の中国で製作された斜縁二神二獣鏡の出土は、大陸との交流が行われていたことを示しています。大正五(一九一六)年には北部九州の考古学や古代史研究をリードしていた中山平次郎博士が、その発掘成果を考古学の研究誌『考古学雑誌』で紹介しています。これらの資料群は、古墳時代前期の良好な資料であるとして、昭和四十五(一九七〇)年に福岡市指定文化財となりました。



五島山古墳出土品(1)

## 二 黒田家と福岡藩士

福岡の名称は、黒田孝高(如水)・長政父子が福岡に新城を築いた際に、先祖の地である備前国福岡にちなんで「福岡城」と名付けたことに始まります。黒田家が福岡の地を治めた約二七〇年間がどのような時代であつたかは、家々に伝わつた古文書などの歴史資料を読み解くことで徐々に明らかになってきています。

黒田孝高は織田信長の死後、羽柴秀吉に任せ、参謀として四国攻めや九州平定などで軍功をあげ、秀吉の天下取りに貢献しました。天正十五(一五八七)年には、豊前国の一部を与えられ、中津城主となります。キリスト教を信仰し、シメオンという洗礼名を持っていました。息子の長政は秀吉の死後、徳川家康に接近し、関ヶ原合戦での功績で筑前国を与えられ、初代福岡藩主として江戸時代の福岡の基礎を作りました。この二人を支えた久野重勝・井上之房などの二十四人の功臣を黒田二十四騎といいます。江戸時代中期には顕彰の対象となり、盛んに二十四騎図が描かれました(2)。



黒田二十四騎図(2)

久野重勝は、父重誠の代から孝高に任せ、九州平定の際には、筑前国高祖城攻めで活躍し、小早川隆景を感嘆させたといわれています。博多の町割りにもその才能

を発揮し、古井戸の場所を頼りに町を再建したといわれています(3)。

井上之房は職隆・孝高・長政の三代に渡り重臣として活躍した武将です。孝高は、信長の中国攻めのさなかに摂津国岡城の荒木村重により幽閉されてしまいます。その時に、栗山利安・母里友信と共に有岡城に忍び込み、孝高の安否を気遣つたといわれます。占部家には、井上之房に仕えた家臣がいたと言われており、長政が之房へ送つた書状が伝わりました(4)。

大坂商人であつた納屋家の初代年芳(小左衛門)は、関ヶ原合戦で石田三成方に人質に取られそうになつた黒田孝高・長政の両夫人の脱出手助けした功により黒田家に一〇〇石で召し抱えられ、その後も長きに渡り黒田家に仕えました(5)。

戸川家、三島家は四代藩主・綱政の時代より黒田家に仕えた家です。戸川家は追廻馬場付近に屋敷を構え、御馬方として、馬の調教等の仕事を代々務めました(6)。

三島家には、長政が重臣に宛てた儉約に関する「三ヶ条法令」の写しが伝わっています(7)。これは、江戸中期には、藩士の心構えを説いたものとして、藩士の家で代々伝えられました。

江戸時代には、島原の乱以後、大きな戦乱は起こりませんでした。藩士は具足や刀の手入れを怠らず、武芸を常に磨き有事に備えました。

二代藩主忠之の代からの家臣であつた村上家では、魅前立六十二間筋兜・紺

糸威桶側二枚胴の鏡、黒漆塗の定紋入り陣笠や、朱塗鎗柄の残る十文字鎗などの武具類（8・9・10）の他、弓術、槍術、砲術、柔術、抜刀術の免許状や秘伝書などの武術書類が伝えられてきました。福岡城下の藩士たちは、砲術の一つとして火繩銃について学ぶこともあったと言われています（11）。

さて、多くの刀剣には、銘が刻まれており、それを基に製作者や製作年などを知ることが出来ます。長田家が所蔵していた刀には、「筑州住源 信国重包」の銘があります。この刀が、福岡藩のお抱えであつた筑前信国派の刀工により作られたことが分かります（12・13）。また、入江家に伝わつた脇差には、「加州住藤原家次」の銘があり、この刀が加賀（石川県）で作られたことを示しています（14）。田隅家では、黒田家に仕官したことを記念して無銘ながらも家宝とした刀が伝わっています（15）。

### 三 江戸時代のくらし

江戸時代の人々のくらしはどのようなものであったのでしょうか。こうした疑問は、各家に伝えられてきた書付や生活道具などを丹念に調査していくことで少しずつ明らかになります。

西区今宿の西村家は、江戸時代から戦前まで「松屋」という屋号で酒造業を営み、「松乃玉」という酒を販売していました（16・17・18）。

江戸時代後期は、庶民の教養書として往来物が多数出版された時代でもありま

した。安永四（一七七五）年に高田政度により編集・刊行された「女用往来物」（19）は、結婚の豆知識や手紙の書き方、姑との付き合い方など、役立つ実用的な情報が収録された女性向けの教養書でした。

本野家には、本願寺八世・蓮如による僧侶や門徒に宛てた消息形式の御文章（文政九年版）が残っていました。これは平易な言葉で浄土真宗の教義が説かれており、教義を理解する手引きとなりました（20）。

### 四 大陸に渡つた人々

近代には、戦争という激動の時期があつたことを忘れてはなりません。戦争などによつて故郷や職場を離れ大陸へ渡つたのは、どのような人々だったのでしょうか。

一鬼三郎氏は、修猷館中学校（現・福岡県立修猷館高等学校）を卒業後、長崎県で小学校教員となりました。大正十（一九二一）年には、教員（校長）として朝鮮に渡りました（21）。

松村榮一氏は、八幡製鉄所に勤務していましたが、日中戦争がはじまると召集され、その後、ビルマへ配属されました。応召後の訓練中に書かれた葉書や戦地から送つた軍事郵便には、家族を心配する気持ちが続られています（22）。

本土で戦争を経験した人々も忘れてはなりません。

高杉養次氏は、戦前から戦後にかけて八幡製鉄所に勤務しました。溶鉱炉へ送

り込む送風に関わる技術者として活躍していました（23・24）。

外地や大陸にいた人々が、本土へ戻る際には、さまざまなものが持ち帰られています。

殿上正見氏が警察官として赴任していた台湾から持ち帰つたものの一つに、ハンモックがあります。これは、子供や孫を乗せて長く使われました（25）。

西田家に保管されていた、チベット仏教の仏画であるタンカは、終戦後の引き揚げの際に親類から託され、持ち帰られたものです。リュックサックに入れるために表装がはがされていました。後に、和表装になおされています（26・27）。

### 五 近現代の福岡

明治二十二（一八八九）年四月一日に福岡市は誕生しました。これまで三十五代にわたる市長によつて市政の舵取りがなされてきましたが、福岡藩士であつた山中立木は、初代福岡市長として市政の基礎をつくりました。立花小一郎は、陸軍軍人を経て、大正時代に第十代福岡市長を務めた人物です。戦場を去り、老いて古里に帰つた心情を詠んだ七言絶句の漢詩を残しています（28）。

市制施行時の福岡市は、それまでの「福岡区（現・中央区の一部）」と「博多区（現・博多区の一部）」を統合した区域でした。大正元（一九一二）年の旧警固村の編入を皮切りに、市域が広がっていくことになりました。昭和十六（一九四一）年には旧糸島郡今宿村が編入されました。今

宿村では合併を記念して集合写真が撮られています（29）。昭和五十（一九七五）年の旧早良郡早良町の編入を最後に、福岡市は現在の市域になりました。

昭和二（一九二七）年三月から六〇日間に渡り、福岡市の主催で、東亜勸業博覧会が開かれました（30）。博覧会の会場として、福岡城西側にあつた「大堀」が埋め立てられました。この会場は、その後公園整備が行われ、現在は大濠公園として市民の憩いの場となっています。博覧会には、東亜という名が付くように、中国や植民地朝鮮などから総数三万四千五百七十三点を数える品々が出品されました。この当時の福岡市の人口が一五万人ほどであつたのに対して、一六〇万人にもなる来場者がありました。博覧会の開催を記念して絵葉書も作られています（31）。市内外から訪れる人のために市内周辺の名所を紹介した案内冊子なども作られています（32・33）。

昭和十一（一九三六）年に創刊された月刊誌『オール博多』には、政治の話題から福岡に関係する人物の風聞、博多・中洲の店舗紹介などが書かれており、当時の博多の情報誌の役割を果たしています



『オール博多』(34)

した(34)。

さて、街へ出かけることは、特別なことであり、その時には新しい服や一番上等の服を身につけたといえます(35)。こうした外出は愉しみであり、その記念に写真なども撮られるようになります。昭和十年代になると、カメラを購入する家庭も出てきました(36)。写真は写真館で撮ってもらうものから、自らの手で撮るものへと変化していったのです。

昭和四十年代～五十年代にかけて、富士フィルムは、個人向けムービーフィルムである「シングル8」に関連した機材を発売しています。「フジカシングル8-1P300」は、三倍ズームレンズ付である点に特徴がありました(37)。

福岡の祭礼に足を運ぶと、たくさんの方がパレードに参加しています。どんたく隊の先頭を歩く「博多松囃子」が前を通ると、松囃子の稚児や三福神(福神、恵比須、大黒)に向けて一斉にカメラのシャッターが切られています。博多松囃子は、パレード以外にも、福岡の関係者を表敬訪問しています。平成二(一九九〇)年の訪問数は二日間約一二〇件(38)。華やかな行列の裏では、三福神たちが忙しい一日を過ごしていることが分かります。

一月三日に東区の笹崎宮で行われる「玉せせり」は、江戸時代中期の地誌『筑前国続風土記』でも正月の風物詩の一つ



玉せせりの玉(39)

として、その様子が紹介されています。かつてはこのような玉せせりが箱崎だけではなく、博多の町でも行われていました(39)。

博多には各町単位で行う行事が多くあります。こうした町の行事には幕や食器などの共有の道具が使われてきました。博多の旧町の一つである矢倉門町では、大正八(一九一九)年、町内の有志によって共有の道具をいれる長持が新調されています(40)。

今年の夏は、例年にない暑さが続き、「雨が降らないけれど水は大丈夫やろうか」という心配の声を多く耳にしました。

大きな河川を持たない福岡市は、明治以降、人口増加に伴う水需要の高まりによって、安全で安定した水の供給が求められるようになります。福岡市の水道事業は、大正十二年(一九二三)年の給水に始まりですが、それ以前の給水元のひとつが井戸でした。井戸から水を汲み上げる際には、井戸用の手押しポンプが使われていました(41)。地域によって、井戸水の中には濁りや金気が多く、飲料水には適さないものもありました。そうした水を飲用可能にするために濾過用の

水甕(42)が使われました。

かつて農地が広がっていた市の南部では、高度経済成長期以降、宅地化が進みます。新たに建てられた家のなかには、家庭風呂(43)が設置されたものもあり、郊外が都市化していく様子を伝えています。

西区下山門には、死者が出ると、「念仏講」と呼ばれる葬式組による扶助の習慣がありました。土葬の頃は、組の中から選ばれた地取と呼ばれる墓穴掘りが死者を埋葬していました。少なくとも寛政八(一七九六)年から続いてきた念仏講は、平成十六(二〇〇四)年を最後に途絶えることになりました(44)。

福岡空港は、昭和十九(一九四四)年に、旧陸軍が席田飛行場の建設に着手したことにじまります。戦後のアメリカ軍の接収による米軍基地としての運用を経て、民間空港として開港しました。その後、数度にわたる拡張工事によって、現在の空港に近い姿となりました。今では、年間一六〇〇万人を超える国内第四位の乗降客数を誇っています(45)。

## 六 福岡の仏師たち

仏像の製作や修理を行う職人のことを仏師といいます。江戸時代から福岡には、佐田氏という仏師の家系がありました。これに属する仏師を「佐田仏師」と総称しています。活動の痕跡は、市内だけに限らず、宗像郡や糸島郡、さらには佐賀県などにも及んでいることが分かっています。

例えば、早良区石釜では、明光寺境内で弁財天を祀っていました。弁財天像の台座裏の銘から江戸後期の仏師・大塚武平慶の作であることが判明しました(46)。武平は佐田仏師の棟梁を示す「文蔵」を名乗らずに大塚と姓を変え、独立して工房を構えた仏師と考えられています。

また、かつて博多土居町にあった称名寺(現在は東区馬出に移転)には、明治四十五(一九一三)年に完成した「博多大仏」(戦時の金属供出のため解体)と共に制作された仏像が安置されています。これは、明治・大正時代に活躍した仏師・高田又四郎良慶により制作されています(47)。又四郎は、仏師としての最初の二年間を佐田文蔵慶尚の弟子として過ごしていたことから、佐田仏師の系譜の最後に位置づけられています。



弁財天坐像(46)

出品資料一覧(文中資料のみ)

- 一、掘り起こされた福岡の歴史  
柴戸家・五島山古墳資料  
1 五島山古墳出土品
- 二、黒田家と福岡藩士  
山田隆夫資料  
2 黒田二十四騎図  
久野英子資料  
3 久野家系図  
占部博資料  
4 黒田長政掟書  
納屋弘資料  
5 黒田長政知行宛行状  
戸川愛子資料  
6 戸川信龍像  
三島とき子資料  
7 黒田長政三ヶ条法令写  
寺澤晃藏資料  
8 魅前立六十二間筋兜・紺糸威胴丸具足  
9 黒漆塗定紋入り陣笠  
10 十文字鍔  
龍秋男資料  
11 火繩銃  
長田昌三資料  
12 刀 銘「筑州住源信国重包」  
13 脇差 銘「筑州住源信国重包」  
田中順子資料  
14 脇差 銘「加州住藤原家次」  
田隅タネ資料(追加分)  
15 刀
- 三、江戸時代のくらし  
西村長實・榑崎久矩資料(追加分)  
16 酒造板札の図  
17 酒屋前掛「松乃玉」  
18 酒造用 手桶  
嶋英子資料  
19 女用往来物

本野令子資料  
20 御文章(御文)

- 四、大陸に渡った人々  
一 鬼秀之助資料  
21 辞令  
松村黎子資料  
22 はがき  
高杉養次資料  
23 送風機・清浄機運転記録  
24 参考簿「廻転送風機詳細」  
殿上正光資料(追加分)  
25 ハンモック  
西田邦彦・深堀千鶴子資料  
26 四臂マハーカーラ  
27 ツォンカパと二大弟子
- 五、近現代の福岡  
友杉政子資料  
28 立花小一郎三行書「百戦沙場一剣残」  
西村長實・榑崎久矩資料(追加分)  
29 写真「福岡市合併記念」  
30 「東亜勸業博覧会鳥瞰図」福岡日日新聞  
香西八十衛資料  
31 東亜勸業博覧会記念絵葉書  
32 「福岡と博多」  
33 「福岡市案内」  
小西俊之資料  
34 「オール博多」  
成澤ヤス子資料  
35 帯  
原田久男資料  
36 小型カメラ「マイクロ」  
原清資料  
37 8ミリカメラ  
「フジカシングル8」P300  
藤井靖司資料(追加分)  
38 博多松ばやし道順(三福神)  
田北太三郎資料  
39 玉せせりの玉

博多高砂連資料(追加分)

- 40 長持  
田中生男資料  
41 深井戸用ポンプ  
松本安雄資料  
42 濾過用水環  
43 風呂桶  
下山門東組西組念仏講資料  
44 念仏講帳  
寄託 福岡空港騒音対策協議会資料  
45 福岡空港周辺空港写真
- 六、福岡の仏師たち  
下石釜井財天堂資料  
46 弁財天坐像  
寄託 宗教法人称名寺資料  
47 弘法大師坐像
- ご協力いただいた方々  
(寄贈・寄託者名/五十音順 敬称略)  
一 鬼秀之助、上村篤子、占部博、  
香西八十衛、小西俊之、嶋英子、  
宗教法人称名寺、高杉澄子、  
田隅タネ、田中生男、田中順子、  
寺澤晃藏、殿上正光、戸川愛子、  
友杉政子、鳥飼幸雄、長田昌三、  
長野幹雄、納屋弘、榑崎久矩、  
成澤ヤス子、博多高砂連、原清、  
原田久男、久野英子、  
深堀千鶴子、深堀良治、  
福岡市経済振興局空港対策部空港対策課、  
藤井靖司、古瀬静子、松村黎子、  
松本安雄、三島とき子、本野令子、  
谷津昌子、山田隆夫、龍照子

福岡市博物館は、昭和五十八(一九八三)年に博物館建設準備室として発足して以来、市民の皆様をはじめ、数多くのご協力をいただきながら、資料の収集を行ってまいりました。考古・歴史・民俗・美術の各分野にわたる収集資料数は、一二万四〇〇〇件以上にのぼります。

新しく博物館に収蔵された資料は、保存、展示するため、二年にわたり整理と調査が行われます。そのリストは、収集年度ごとに『収蔵品目録』として刊行しております。また、博物館の資料収集活動を広く市民の皆様を知っていただくため、毎年『新収蔵品展』を開催し、新たに収集した資料をご覧いただける機会を設けております。

第二五回目の今回は、平成二十二年度に収集し、整理と調査を終えた一五九六件の資料の中から約一〇〇〇件を展示いたします。新収蔵品展の開催にあたり、貴重な資料をご提供下さいました皆様に厚く御礼を申し上げます。また、ご覧いただいた皆様には、この展覧会を通して福岡の歴史と人々のくらしについて一層の関心を寄せていただくとともに、福岡市博物館の資料収集活動にご理解とご協力をいただければ幸いです。

福岡市博物館 〒八二四一〇〇〇一  
福岡市早良区百道浜三丁目一番一号  
☎〇九二・八四五・五〇一一